

聖金曜日 主の受難

2011.4.22

イザヤ 52・13-53・12

ヘブライ 4・14-16,5・7-9

ヨハネ 18・1-19・42

今晚、私たちは十字架上の主に招かれて、ここに集っています。

灰の水曜日から始まった四旬節の間、私たちは信仰における回心を心がけてきました。回心とは、私たちの日頃の生き方を振り返り、信仰者としての新たな目覚めを求めて、神に立ち返ることです。四旬節、そして迎えた過ぎ越しの聖なる三日間のこの季節、私たちがそのみもとに立ち返るべきお方は、十字架のお姿をもって、私たちを待っていてくださったのです。そのことに気付くことが、私たちにとっての回心の全てです。あの十字架のお姿をもって、神はこの世に生きる私たちに、ご自分の全てを啓示してくださったからです。

もちろん、私たちが信じる神は、全てのものの創造主である神です。けれども、現代世界に生きる私たちは、どこまで、世界の創造主である神と、その被造物としての私たちの関係を真面目に受け止めているのでしょうか。自然のもたらした大災害と、それによって引き起こされた、科学技術によって保証されている私たちの生活のこれほどの破綻に直面しても、私たちはかつての私たちの祖先がそうしてきたようには、それらを神仏のせいに帰し、神仏に祈ることに躊躇を感じます。創造主である神は、ご自分の被造物であるこの世界にもはや何ら、有効な救済手段を与えることが出来ないでいるかのようです。現代に生きる信仰者である私たちは、私たちが信じる神と、私たちの世界のこのような関係を直視しなければなりません。信仰者である私たちの日々の生活を振り返って考えてみても、私たちが信じているはずの神と、神を信じている私たちの生活の間には、このような引き裂かれた神と私たちの関係が横たわっていることを認めざるを得ません。

けれども、神と私たちとのこのような引き裂かれた関係は、今にはじまったことではありません。聖書をその最初から読み返してみるなら、創造主である神と、創造主である神の似姿として創造されたはずの私たち人間の間には、その始めからこのような引き裂かれた関係が横たわっていることが分かるはずです。聖書はその全体を通して、創造主である神とその被造物である私たち人間の世界のこのような引き裂かれた関係の歴史を語っているのです。聖書は自分たちの世界から、創造主である神を締め出すことによって、私たちが引き裂いてしまった神との関係の歴史、創造主である神に対する人間の罪の歴史を語っています。と同時に、それにも関わらず、そのような私たちを、御自分と

の関係に呼び戻そうとする神の、関係修復を求める試みの歴史をも語っているのです。洪水とノアの箱舟の物語も、アブラハムの召命の物語も、出エジプトの出来事も、そのような神からの働きかけの歴史として語られているのです。旧約聖書の中心をなす、シナイにおける神の契約に与って、神の民とされたイスラエルの民の歴史は、まさに、創世記から始まる神と人類のこのような歴史の典型として語られているとも言えます。

私たちが洗礼によって受け入れたキリスト教の信仰は、旧約聖書に示されている、神と私たちの世界のこのような歴史の延長線上に、神が示された究極の人類に対する関係修復を求める姿として、イエス・キリストの十字架を示しています。

イエス・キリストの十字架において、神はどのようなことを私たちにお示しになっているのでしょうか。

今回の地震と津波の被害による原発事故の報道を見ていて、被害地の方々はもちろんのこと、多くの私たちが最も釈然とした思いになれないのは、これほどの事故の責任の全てを負うことの出来る人がいないということです。今この時の政府の責任者も、電力会社の経営責任者も、この事故の責任をどう取れるというのでしょうか。どう取ろうとしているのでしょうか。被害地の方々が今最も求めていることは、せめて、この事故によってもたらされた自分たちの苦しみを、本当に受け止めて、謝罪してほしいということです。けれども、一人の人間としての、時の責任者たちが、その苦しみの全てをどうしたら本当に受け止めることができるというのでしょうか。それを本当には受け止めきれない人たちが、謝罪することにどのような意味があるというのでしょうか。どのように保障を積んでも、決して元の生活には戻れない保障とは何であるのでしょうか。今私たちは、また新たに、私たちの歴史が経験してきた、私たち人間の力だけに頼って作り上げてきた世界の、持って行き場のない袋小路の憤りと悲嘆を経験しているのです。

イエスの十字架は、そのような私たちの世界の真の創造主である神が、この世界の最終的な責任を負う者として、自らを十字架の上に曝しておられ姿に他なりません。それが、私たちとの関係修復を願う、この世界の真の責任者としての、私たちすべての者の創造主である神の、究極の愛のお姿なのです。

何故、私たちの主であるイエス・キリストは十字架の上に死なれたのでしょうか。

一人の人間となられた神は、人間として味わうことの出来ることの世の私たちの苦しみに、悲しみの全てを味わうことのできる場に自らを置くために、十字架の死を選ばれたのです。十字架の死は私たち人間が味わうあらゆる生理的な苦しみの限界の死です。その全ての苦しみを、身をもって味わうために、一人

の人となられた神は十字架の死を選ばれたのです。けれども十字架の死は私たちが経験する肉体的な苦しみへの、神の連帯を示すだけではありません。十字架のイエスは、この世の権力闘争に巻き込まれ、敵対者たちの憎悪の的となって、その闘争に敗れた者として、人々の侮蔑を一身に浴びて、十字架の死を迎えられたのです。弟子たちからさえ見限られた者として、その心のうちの思いを誰にも理解してもらえない孤独のうちに、十字架の上に死なれたのです。「わが神よ、何故私たちお見捨てになられたのですか。」との叫びを挙げざるを得ない絶望を経験されたのです。十字架の上に死に行く自分を、ただ見守るしかない母親の悲痛な看取りの中、その母の息子としてイエスは息を引き取ったのです。

何故、神その方である、私たちの主イエス・キリストはこのような十字架の死から身を引こうとはなさらなかったのでしょうか。私たち人間がおおよそ経験し得る、全ての苦しみの淵に身を置くことによって、その苦しみの淵に突き落とされた私たちの側に寄り添うためです。その苦しみの意味を問い、その苦しみの責任を求める私たちに、神としての謝罪を申し出、その十字架の苦しみの姿をもって、和解を求めるためです。

これから行われる十字架崇敬の儀で、あらためてイエスの十字架のお姿をしっかりと心に刻みたいと思います。そして、私たちが経験するであろう全ての苦しみの中に、十字架のイエスがともにいてくださることに気付くことのできる信仰の恵みを願い求めたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高